The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	勢語通について
Author(s)	八木, 毅
Citation	語文. 1954, 10, p. 19-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68438
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

勢語通について

八木　毅

一

「宝暦元年冬しはす筆を冽庵の南窓にとる」

これは二巻四冊（内巻上下、外巻上下）からなる勢語通、五井蘭洲自筆本（懐徳堂蔵）の奥書である。

勢語通は蘭洲の和学関係の著述中、今のところ、その成立年代の最も明瞭なものである。

伊勢物語拾穂抄をあらはした北村季吟は蘭洲八才の時に亡くなり、伊勢物語童子問をあらはした荷田春満は蘭洲三十九才の時に歿してゐる。また、彼が伊勢物語の注解の書として勢語通を著作するにあたって、いちばん負ふところの多かった契沖の勢語臆断は、彼の生れる五年前の元禄五年九月に、契沖の兄如水によって浄書された旨が、同書（円珠庵蔵本）の奥書によって知られてゐる。

現在、懐徳堂に所蔵されてゐる蘭洲自筆の勢語通は縦三十糎、横二十糎の美濃紙袋綴で、同筆による題簽には勢語通 内巻上（以下三巻これに類す）とある。

内容記述の順序は、内巻の巻初に先づ伊勢物語の解題に始まる序文があり、そこで蘭洲独自の勢語観が披瀝され、内巻、外巻の区別はそれに所由するものであることを明らかにしてゐる。外の巻の巻頭には、勢語通の旨意を簡明に再説して識語としてゐる。

次に勢語通の構成の大略について述べよう。

二

勢語通は蘭洲の勢語観の顕著なる投影である。勢語通の一大特色は実にかかってここに存するのである。

契沖は勢語臆断の巻頭に、「此伊勢物語は在原業平朝臣の一生の事をしるせり」と言ってゐる。そしてその内容に、歴史的な事実としての業平の自記と、文勢をそへるため虚実とりまぜた実録ならぬ後人による作り物語とが混淆してゐることを指摘してゐるが、具体的にどの段が前者で、どの段が後者であるといふ截然たる二分は試みなかった。

蘭洲は勢語臆断において契沖の試みなかった右の二分を勢語通の内巻と外巻といふ形で実践した。かうした勢語の内容による排列変へをしたものは、中世近世にかけてざっと算へただけでも四十を越す注釈書のうちにもごく少数しかないやうである。（「伊勢物語披雲」は主人公の推定年令順に配列すると云）蘭洲によれば伊勢物語は中将（業平を彼は中将としか云はない）のことを主としてかいた物語である。そこで全篇を二巻に分ち、一、実事と考へる段だけを抜きだした古人の注（主として幽斎・契沖）を用ひ、蘭洲みづからも意見を加へ、それを内巻とし、子女の教養の書として用いても差支へないやうにした。この巻では、業平に慨世憂国の志があったことをあきらかにし、好色漢の汚名を雪がん

ことをねがった。二、男女のあるまじき密かごとを書いてあるのは多くは作りこしらへたことで、実事ではない。これらを集めて外の巻とした。外巻はただに歌があるのを利用して虚構したものであるから、なんのとるところもないが、修辞・表現のすぐれてゐるによって従来の諸注の欠を補って注解を施したのである。「作りものがたりと見ゆるして見れば又淫をいましむるたよりともならんか」といふところに蘭洲はこの巻の意義を考へてゐる。

ところでその外巻の内にも「中将の心ありてよめるも見ゆれど詞書を男女のことに託していへれば内の巻に入べくもあらず」(識語)と内巻・外巻の区別の基準を、物語的要素の文芸的価値におくのではなく、あくまで倫理的判断においてゐることを明らかにしてゐる。

童子問もまた伊勢物語に対して儒教的な道徳思想でみてゐて、純粋な文学的理会が行はれてゐない点や幽斎の闕疑抄を尊重してゐる点で勢語通と共通してゐるが、主人公を実在した人物業平とはみない点、つまり業平の歌はかりてゐるが物語は全く架空なものであると考へる点において勢語通と相違してゐる。

伊勢物語の作者については、古来①業平自記説(袖中抄)、②業平の自記に対して伊勢が仮作を補ったとする説(流布本奥書)、③業平以外の男子述作説(古意)、などの諸説があって、いまなほその成立の事情は不詳とする他ないが、勢語通は闕疑抄に従って前述②の説を執り、女房伊勢が、業平の自身書いたものをもとにし言葉を加へ、虚構もして七条后温子に奉ったものであるとしてゐる。

具体的には伊勢物語のⒶ発端から第一一三段(昔男やもめにてゐて)までの間は元来業平の心ありてかける自記であったと推定し、その自記に対して伊勢が清書する時、少しづつ書き改め、また詞をくはへ、業平に関係のないことをものせ、作者不明の歌をも加へたとする。Ⓑ第一一三段(昔仁和のみかど)以後の段は伊勢が聞云へた所をⒶに追加したものである。終りに業平の臨終の歌をのせたのは、自記ではないといふ証としたものであり、年代的に伊勢歿後の記事のあるのは、後人の註が本文へ竄入したのである、と序文でいってゐる。

また、段序のたてかたについて、かういってゐる。元来は一段々々が内的に密接に連関してゐたはずであるが、伊勢の作意が加はって、次第にそのつづき具合が稀薄化した。そして巻初の五巻を外巻の巻初においたことについては「われこころありてかく置あらためたり」とだけ弁じてゐる。

以下、伊勢物語の主人公を業平とし、その本文を業平の自記とする勢語通の内部に立入って蘭洲の見解を尋ねてみよう。

三

第八十三段「世の中にさらぬわかれ」の歌に対して蘭洲は、「中将のこころ孝行なるをこの歌並に詞書にておしてしるべし」といひ、その次の段の注解において、「この前段は、老ぬればさらぬ別れの歌の段なり、忠孝をならべたり。」といって居る。

第五十段「うゑしうゑば」の歌の注に、「うゑしうゑは重ね詞なり、下に詞をふたつにいひなしたるは上の句に重ねたり、これ中

将の風骨なり……此人中将の親しき友だちにて、さて不遇の人なるべし、今こそ不遇なれ、時のいたらば必志を得てさかえ給ふべしとなぐさめたるなり」と彼は業平を〃不遇〃なる人物として把握してゐる。「おもふこと」の歌について「その一生の事此うたにておしはかるべし……この一段と下の一段とを此ものがたりのとちめにおけるを見れば、(作者)伊勢は中将の心中をはかり知れるにや」とし、ただ中将の人となりを知り、其時勢をよくうかがひはかりて、此歌をあぢはったならば其の不遇の人の片鱗にでもふれることができやうといって居る。このやうに、業平は不遇で風骨のある人であるといふ認識は、第百段「さくら花の」の歌を注して、業平の時代は繁栄を極める藤原氏にあげて媚びへつらひ、その恩顧をかうむらんことを願ふ者の徒らに多い時代であった。そこで「この藤氏繁栄なるも近代のことにてこそあれ、そのかみはかくはなかりしなり、ゆゑにありしにまさるといへり」と説き、慷慨の心が実外にあるといってゐる。

それ故、三代実録に業平の人物を評した「放縦不拘」の句も決して好色の意にはとらず託する所ありての自然的でないみせかけの振舞であったとし、業平の東下りの原因を伊勢物語の本文に「京にありわびて」とか「京や住みうかりけん」とか抽象的な推定でしか示してゐないにしろ、その旅にある業平が「京におもふ人にいひやる」の文中おもふ人とあるのは、「中将のこころざしを同じうする人なるべし、婦人にはあらざるべし」と説いてゐるところなどは、勢語通の一大特色である。蘭洲によれば、世の中をしるといふことは国家の混乱、朝廷の盛衰のよる所をしることであり、「歌はよまざりけれど」と「世の中をおもひしりたる」とを逆接せしめたこの物語作者の意図を、歌を軽んじ、世の中のことを重じてゐるのだとし、彼自身、歌はしらずとも世の中のことを知ってゐる人は朝家の御かため、天下のおもしとなることだらうと言ってゐる。このやうな蘭洲の業平観にとって都合のよい例証となるものの一つは第六十一段の「名にしおはゞ」の項である。すなはちその解に、「この男、色ごのみとみづからゆるせどまことにはあらじとなり。これらもつくりていへるなり。」とある。

第五十六段「むかし男、人しれぬ物思ひけり、つれなき人のもとに、恋わびぬ云々(歌略)」を蘭洲は、中将の胸中おしてしるべし、良工心独苦の風情にて、人のしらぬ憂を常に心にもたる故、みなわれからの事となる、又このこと人にかこちいひ難かるべければ恋の歌によそへてかくいへるなり。世の歌人たち、まさに中将の心をしらんや、と彼自身この段を外巻に入れておきながら、かうした解をするのはいささか無理であらう。これも、第十七段の「くれなゐに」の贈答歌が、蘭洲の業平観の支へとなってゐることをその注解によってわれわれは知ることができる。すなはち男には好色の心なく、二条の后高子が業平にけさうしかけて来たのに対して、「女のいき過たるをいましめたる歌」であると。業平に対するかうした蘭洲の理解の仕方を第三十一段はさらに増強するものである。業平は容貌閑麗と史に記されてゐるところから推しても、宮廷婦人のあまた彼を恋慕したらうことは容易に想像されるとし、さうした場合にも、彼は女房たちにいらへもしないで却ってそしられ、彼女らの中には彼を「うらめるもおほかりしと

おもはる」としてゐるのである。そして第三段終りの「二条のきさきのまだみかどにも云々」の本文を、諸註に従って後人の書加へとし、かうした宮廷の、ことに后の恋物語には名をいひあらはさぬを本意とすべきであるから、これは無用の注である。「実不実たしかならねば信ずるにたらず」と却けてゐる。

蘭洲は業平を「好色の先達」の位置から引き下ろし、その代りに、不遇で、憂国の志のある、慷慨の士といった偶像にしてしまったのであった。それは西村天囚氏の懐徳堂考の蘭洲略伝を参照せられたならば分るやうに、蘭洲自身『ひそかに恃むべき学才をもってゐるのに、不遇である』といふ意識があって、数々の運命の冷遇に出合った彼の心が実感を以て、彼自身の祀りあげた在五中将の偶像に共感してゐたのではなからうかと思ふ。このことは彼が、三十才、江戸に住んでゐた頃、隅田川の畔にある在五祠に題して

薄倖名空在
遺文血食長
可憐風雪夜
誰為断愁腸

といふ小絶句をものしてゐるのによっても知りうるであらう。

四

勢語通の内の巻は既述の如く高い倫理性をもつものだといふ考へをもって蘭洲の編輯した巻であるが、それを「我家のいせものがたりとし、ひとつ子のむすめによまし」めんと序文で言ってゐるのを見て彼がこれらの物語から、何か教訓を得、子女を教養せんとした意図がくみとられる。さうした心がけから、蘭洲の内巻に入れるべき段は、中将の自記といふ、彼自身の用意したふるいにかけて綿密に審査されてゐる。外巻は、さうした彼の意図に即さないものであり、倫理性の低いものであるとしてゐるのである。

さうした意味で第二十三段「つつゐづつ」の歌のある段が外の巻に追ひ出されたことには蘭洲の心がよくあらはれてゐて興味がある。

此歌女のきはめて貞心なるに、いかなれば内の巻にとり出でざる。貞心は誠に貞心なれど親のあはすれどきかざりしは、人のむすめの正しき道にはかなはず

蘭洲の倫理観は右の言葉において端的によみとられることであらう。

また、「山しろの」の歌（第百二十二段）に対して、蘭洲は、「世間の事に誓約したる事を中ごろ変じたる人のありて、この男女のことに託していへるか……およそ、世の廉恥をしらぬ人は約を変ずることをなにともおもはぬものなり。皆利害をゑらみ、去就にかろき者のしわざなり」といひ、「外の巻のよき巻軸の歌也」といってゐる。

かうした観点に立って伊勢物語の各段を考へ、彼の偶像としての〃中将業平〃を語るにふさはしくない段は伊勢、又はそれ以後の人の手によってなされた仮作物語である、として勢語通では外の巻を形成してゐる。そのことを述べた蘭洲の注を若干ひろってみよう。

①（第五段）この一段後人の注なり　伊勢などが書加へたるかそら言なるは論ずるにたらず此次の段をみてことさら作り物語を信ずべし

②（第六段）これ注者の書加ふるところ論ずるにたらずこれを実とするより種々の惑説おほく出来るなり

③（第廿六段）贈答の歌はさきの詞を用ひて答ふるにこの歌男の歌にかけ合ぬ歌のすがたなれば　元より別の歌なり　それをここに贈答にするは　これ又作り物語なれば　とり合せて贈答とせるなり

④（第十二段）闕疑抄にいはく　殊に作物語なれば　なき事を書げるなり　又いはく　此歌あるよりしてこの段をは書出せりといへり　尤さあるべし　愚案この段にかぎらず此物語の内男女の事を書しは皆なき事を歌によりて作り出せるなり　およそ此外の歌物語おほくはしかり　そのうへこの段女の歌によりて書出せり　男とだにいへば中将のことなりとす　まことにひがごとなり

⑤（第七十三段）この歌（「目には見て」の歌）万葉に出でたり　歌あるゆゑに物語をつくりたるなり

⑥（第六十八段）この歌（「君やこし」の歌）分明に中将の家風なり（注古今恋三読人不知題不知）つくりたる物語なれば斎宮の歌にあらざるはしれたる事なり

⑦（同）女子の主たる斎宮の家に止宿あるべきやうなし……しかるを一夜にてかくありしは名誉の色好みのしるしなどいふ　まことにわらふべし　みなつくり物語とみて其実をただすにおよばぬ事なり

⑧（第六十二段）古今集には下の句われをまつらん宇治のはしひめとあり　作りたる物語なるゆゑ　古歌を引直したるなり

⑨（同）契沖いふ　在五中将とあるは後の記者の詞なり　といへり　さあるべし　中将自記の内のかかるところに　たとひ実事なりとも姓名はあらはさぬことわりなり　いはんやこの事あるべくもなきつくりごとなるをや

⑩（第六十四段）わずかに在原なりけるといふ詞にて　おほやけは清和のみかど　女は女御高子　おほみやす所は染殿の后と申すことのしられたり　これ前段にも在五中将とかけるごとく　後人の書くはへて　それを見せんためなり

右の諸項によれば、伊勢物語の作者は、先づ歌を引き、それを骨子として各段の物語を仮作したと考へるのである。

⑪（第五十九段）愚案これらの事全く中将のことにあらず　聞伝へしままに書付たるなり……そのうへこの歌（「さ月まつ」の歌）古今に入てよみ人しらずなり。

⑫（第五十七段）これら女の口より出でたる歌にあらず　中将のまうけてつくれる歟

⑬（第四十二段）すべてこの歌（「ほと　とぎす」の歌）の作者詞たらぬ事のおほきは其風骨也

この三項では夫々について考へてみると、次のやうな矛盾がある。すなはち、⑪では、外巻に彼が択び入れた段であるから、この段の宮仕へ忙しくしてゐる間に妻に逃げられ、やがてその男が宇佐八幡宮への勅使となって下る途中、思ひがけずかつて逃げた

妻が或る国で勅使の接待をする官人の妻となってゐた。そこで男は、花橘の香になぞらへて昔の馴染を酒宴の席で歌ったところ流石の女も尼になった、といふ物語は無稽の伝説であるといふ。それは外巻を立てた蘭洲の立場からは当然さうあるべきであるが「さ月まつ」の歌が古今集に作者不明であることと、どれだけの関係があるか。恐らく⑩までの彼の附注意識には、伊勢物語各段の仮作物語は、夫々の段の歌を中心に虚構された、といふ考へが働いてゐるのは明白である。それはいい。しかしここでは彼は、モティーフとなってゐる歌が読人知らずだから自然、物語も業平のことを語ってはゐないといふ風にとれる説明をしてゐるのはよくない。実は彼自身、ここで自家撞著に直面してゐるのである。内巻上に入れてゐる第五十八段に例をとって言へば、「わがうへに」の古今集雑上題しらす読人しらすの歌に蘭洲注して曰く「中将世をいきどほり身をうくおもへば死生に念なしゆゑにかかるいささか世を弄するたはぶれ歌をいひ出せり」と。また⑫の注は逆に、同様古今集によみ人しらすとなってゐる歌を、中将仮作だらうとしてゐる。これは外巻には業平自記以外の全くの虚構物語を集めたといふ序文および識語に矛盾しさうである。また⑬の注で、すべてこの歌の作者といってゐるのは、古今集に読人しらすとあるこの歌を勢語通においては暗に業平の作と断じてゐるによることが分る。第八十二段の「わすれては」の歌（古今集所出雑下業平）の蘭注に、これらの歌いはゆる詞たらすして心あまれるなるべし、とある。蘭洲は古今序の業平に対する貫之の批評としてのこの言葉に深く共鳴するところがあったやうである。ここで作者不明の歌に、この評言をなしてゐることも亦蘭注が「ほととぎす」の歌を業平の作と考へてゐた傍証とはなりうるであらう。

⑭（第五十六段）中将の胸中おしてしるべし　良工心独苦の風情にて人のしらぬ憂を常に心にもたる故　みなわれからの事となり　又このこと人にかこちいひ難かるべければ恋の歌によそへてかくいへるなり　世の歌人たちまさに中将のこころをしらんや

この蘭注は「むかし男人しれぬ物思ひけりつれなき人のもとに恋わびぬあまのかるもにやどるてふわれから身をもくだきつるかな」といふ伊勢物語中でも最も短い段の類に属するものに附されたものであるが、この歌は新勅撰集恋二に読人しらすとして入ってゐるものである。恋の歌をこの蘭注の如くに解するには相当無理なことは一読して分る通りである。彼がこの段を業平の自記の如く見ながら、外巻においたことは、これまた序文および識語に言ふ原則に合致しないところであるが、表現が恋物語の体をかりてゐるとみたために子女の教養の上に資するといふ立場から、都合わるしとして内巻に入れなかったものであることは、容易に想像されるところである。

右は勢語通外の巻を構成附注した蘭洲の態度について述べたのである。

五

蘭洲が伊勢物語の中に見出さうとした業平のすがたは、先づ歴史上における藤原氏と在原氏との併存のしかたの把握と、その偏

った教養とによって方向づけられてゐたやうである。彼は、だから言はば、文学としての伊勢物語　の主人公に対して、伊勢物語を読むに先立ってすでにある先人観をもってゐた。その傾向の具体化が勢語通となったのであると思ふ。

蘭洲によれば伊勢物語の主人公は既述の如くに朝家の忠臣であり、母思ひの孝子であり、その上第四十五段（昔男いとうるはしき友ありけり片時去らずあひ思ひけるを云々の段）の蘭洲には、「この友といへるはいかなる人にかあらんいとゆかし　中将と志を同じうせし人なるべし　これも時にあはすしてゐなかにいきて住るなるべし」「中将朋友の信あるを見るべし」（勢語通内容）ともある。

蘭洲には後述のやうな和歌に対する理会力もあったけれど、登場人物の表象を要する物語の理会といふ限りにおいて、決してすぐれた能力をもたなかったばかりでなく、むしろそれを儒教的倫理観により歪曲して、評論・注釈してゐると見るべきだと思ふ。

蘭洲は厳羽の詩論を引用して「詩は解すべく解すべからざる間に在り」といったことば、そのよき例として第四段（外巻上）「月やあらぬ」の歌をあげ、

かかる歌を見れば後世の歌はわざといひ残して上手めかしたるあり、さなければ得いひおほせざるあり、又いひつくして味のなきあり、又はただ三十一字つらね出したるまでなるあり、歌も又得がたしといふべし……わがみひとつはといふにてこそのこの二人ありしをふくめり　ひとつはは文字絶妙なり……さて上の句に春をふたつかさね　下の句に身をふたつかさねて句調をかなへ　上の句にはあらぬならぬと詞を用ひて下の句はにしてといひとめ上の句には月や春やといひかけて下の句にひとつはと転じたるさま自然と句到り字到る　これをよめば先歌の心はしらでも　人心に感するところありまことに古今宇宙間の名歌といふべきにや

と評してゐる。彼はまた、彼の時代の歌人たちの古典主義あるひは擬古主義を非難して、歌人たちは用語ひとつにも典拠を求めて作歌し、独創性の枯渇してゐることを指摘してゐる。そして古い時代の歌人たちは、自己の創造した表現を、後世の歌人たちが尊重し無批判に反芻しようとは思はなかっただらうともいってゐる。（外巻上、第五段の注）　このことは古注に伝へて来た伊勢物語の秘伝七ヶ条をさして、「ひがごと」と断じ去ったのと共に注意しなければならないところであらう。また「風ふけば」の歌（第二十三段）を注して、この歌の解釈に白浪盗賊のことを引くことの不可なることを言ってゐるのも妥当である。

しかし和歌の解釈にも蘭洲独自の伝がその妥当な理会を阻む場合亦尠しとしない。その例をあげれば、「いにしへのしづのをだまき」の歌（第三十二段）の注に「中将この歌をよんでおのれが志をのべ　さてわれにひとしき人なければこれをくらまさんとて詞書を男女の事のごとくただ一筆かきおくに此詞をそへたるは、もし後世にわれとひとしき人あらばおもひはかりて見よとのこころなり……この時の世のさま藤原氏ならぬ諸氏の三公に至るはまれなり……昔は諸氏より政要の地にいたりし事なれば今の世のさまを変じて昔になしたきと也　あらはにいひがたければ男女の事

に託していひ出せる也　しかるにこの注（闕疑抄）のごとくにては中将地下の霊さぞ心うき事におもはれん」といひ、「いえばえに」の歌（第三十四段）の註に「此歌もためにする事のありてよみ出せるなり　ただ男女の間のことならんや」といってゐるなど同類である。これらは蘭洲の業平観から打出した歌解であるが、彼の儒教倫理観を拡大して和歌に直接的な教訓を得んとしてゐる例は第二十四段の「梓弓ひけどひかねど」の歌解である。男と女とが片田舎に住んでゐた。男は宮仕へをするために都へ上って三年、妻には一度の便りもしなかった。待ちわびてゐる時、いと懇にいひかはせし第二の男と契ってしまった。そこへ男が帰ってきたが、結局は女を恨みながら去っていった。女はやはり最初の男を愛していたのであったが。そこで蘭洲は「外の男といひかはせしにまぎれなければいひわけはせんなし　これによりて守るべき事はいつまでも守りをふするをよしとすべし　されど男にもとがあり帰りこすとも音づれにてもあらばかくはあるまじきなり」と、これは歌解や注解の域を越えて教訓である。

六

勢語通が伊勢物語に対して独自の見をもってゐたこと右に述べた通りであるが、さらに物語のある部分についての解で卓見、新説、謬説も幾つかを数へることができる。

第十七段勢語通内巻上（むかしとしころおとづれざりける人の云々の段）に、あるじ　あだなりと名にこそ立てれさくらばな年にまれなる人も待ちけり　業平　けふこすは明日は雪とぞ降りなましし消えずはありとも花と見ましや　の贈答歌がある。この両首はともに古今集春の部にあり、宗祇をはじめ、すべて恋の歌とし、男女贈答としてゐるといふのだが、蘭洲はそれらに対し、「中将の事にてだにあれば恋とするはまことに笑ふべし　ある人のいふ　あだなりといふは恋の詞なるゆゑなり　予答ふ　後世の歌のおきては中将のときはなきことなり」と卓見をのべてゐる。しかし、この事は蘭洲にとって座右の書であった勢語臆断に同解のあるは「契沖云」と彼がことはってゐないだけに残念である。

第一段外巻上で、「かりにゆきけり」の「かり」を蘭洲は「かりの住居なり　中将の故ありて家に住みうくて　かりの住居せんとて奈良にゆかれたるなり　旧注いづれも狩猟なり」といってゐるのは確かに異説だが、これも旧注にある説であり、またその前に「この男といへるは業平をいふと申伝へたり　然るに男といへるみなみなかならずしもしからず」といってゐるのは闕疑抄「男にといふは段々業平の事也」と注してゐる如く古注は大体男すなはち主人公を業平としたのに蘭洲の右の説はそれらと著しい対比を示してゐる。蘭洲のこの見解が、勢語通を内・外に分たしめたものといひうるだらうと思ふ。

次に勢語通における謬説とゐうるものを若干あげよう。あしのやのなだのしほやきいとまなみつげのをぐしもささずきにけりの歌（第八十六段　内巻下）の註に「万葉集時分の人の歌なるべし此歌を新古今集にはなりひらの歌とのせらる　ひそかに思ふに中将みすからよめる歌をみづから証拠にせらるることはあるまじ」といってゐる。この歌の体から考へて万葉時代の作と推定するの

は無稽であるとは断じえないが、　例をあげればやはり新古今集にあって伊勢物語では第二十八段所出の業平花にあかぬなげきはいつもせしかどもけふのこよひに似る時はなし　の歌なぞは右の歌に劣らす素朴であるといへると思ふ。

第百二段の　そむくとて雲には乗らぬものなれどよのうきことぞよそになるてふ　の歌に注して「人たるものの世のことをよそに見るといふことのあるまじきとなり」といってあるのは牽強のそしりをまぬかれまい。

第二十三段「くらべこしふりわけ髪もかた過ぎぬ」の歌の注で「かたすぎぬ」を、通説「肩すぎぬ」に対し蘭洲は「一方ばかり過てながくなりたるなり」といってゐるのも解釈に無理があるやうに思はれるし、第九十一段の　あしべこぐたななし小舟いくそたひ行かへるらんしる人もなし　の歌解で

たななし小舟　万葉に無欄小舟ともかけり　欄はらんかんのらんにて高きより下へ物の落ぬためのふせきなり　舟にものをつむに　かきたつといふ物を舟の左右にまうけて落ぬやうするなり　なほ欄のことし　かきたつのなき舟はもとより小舟にて　ひききなり

といってゐるが、万葉集に巻一・巻三・巻六とある三例の「たななしをぶね」はみな「棚無小舟」とあって語序・用字ともに蘭洲は間違ってをり、従ってその説明においても「たな」を欄干の如きものとするのは妥当をかく。棚は和舟の舷側に設けた波除けの棚である。

しかし第八十二段（内上）で、水無瀬を河内国なりと注したのはこの書中でいちばん目立つ誤りである。また、第八十段「しほかまの」の歌の注において、万葉にみちのくの名所おほくいでたれど、しほかまはなしといってゐるのは確かにさうであるが、しほかまを歌によんだのは此中将をはじめとすべしとし、「古今つらゆきの歌の詞書に塩かまといふ所のさまをつくりけりとあるはいぶかし　すべて古今に詞書にうたがはしき事多し」と頭注に記して右の説を合理化してゐるがそれでは納得できないばかりではなく、古今集巻二十の東歌中に「しほかま」が二首の歌によまれてゐることに彼は気づいてゐなかったやうである。

また例へば第二十一段（外上）の注に、

男女の間の細事よりおこりて世をうくおもひて此男女の家を出てゆくなり　男の女の家にかよひて住しなり　この愚案は古来の注と大いにたがへり　昔はすべて女の家に男のすむならひなれば出でゆくといふは皆男也　それを女の出でゆくとみるよりあやまれり

大いに気焔をあげてゐる。闕疑抄にしても古意にしても女が出てゆくとしてゐるのだが、臆断には、

是はむかへて妻とせし女の出ていにたるやうにかきたれど此段のをはりに　おのがよよになりにければうとくなりにけりといへるを思ふに　まことに夫婦とさだまりたるにはあらでかよひける所を出ていにしなるべし

と契沖が云ってゐるから、「愚案」実はこれも契沖説の祖述とでもいふべきものである。

蘭洲はさきにも言ったやうに第一に勢語臆断の説、第二に闕疑

抄の説を多く参照してゐるのだが、今のべたやうに、説を引きながら「契沖云」とことはらず自説の如くにみせかけてゐることが屢々ある。しかしながらそれは元来この勢語通は公にするつもりのものではなく、序文にいふやうに、ひとりむすめのため述作したものであると考へることもできるが、わたくしは自筆本の頭注および本文に附した傍注よりして、自家における講義のための備忘的なものであったと思ふ。それ故、契沖の説に示唆されながらそれを一々ことはらない時があっても、彼を責めるのはいささか酷に過ぎるかも知れないと思ふ。

七

勢語臆断と蘭洲とを介しての契沖と勢語通との関聯について略述しょう。

前節においてのべた通り、勢語通には契沖の説の影響が大きいが、そのケースを大別すると①契沖説の継承　②契沖説の敷衍　③契沖説への批判　の三つに分っことができる。

①第九十五段「あまのさか手」の語釈で契沖は旧事記をひいて神事などで手を打つことがあるがそのことだといふのをうけて蘭洲は「天のさか手の出所まことに是なるべし他説は皆よるにたらず。契沖よくも考へ出したり、」と契沖の説に賛同してゐる。

第二十三段「ふり分髪」の語釈では『万葉に　はなちの髪ともいへり」と契沖いふ』と蘭洲は万葉における用語例なども契沖から得てゐることが分る。（源氏物語の場合も同じ）

第六十八段「中将のかりの使つとめられしこと記録になし、契沖もいふ　清和のみかど鷹犬の御あそびし給はねば　かりの使はあるまじといへり」と自説を契沖によって権威づけてゐる。

第二十五段「見るめなき」の歌とその前の「秋の野の」の歌との贈答関係を論じ「契沖の解古来の注と同じ」といってゐるのは彼が終始契沖の注釈を参照してゐたことをよく示してゐることばである。

第四十一段「しでのたをさ」の語釈。愚見抄の説を闕疑抄によって引き、「契沖が臆断にもたしかにはとかす　いま考ふべからす」と彼が忠実に契沖の註釈を辿ってをることが分る。

②第一段「みやび」の語釈。契沖が継体紀に斐然之藻とあるのを引用し、その藻にみやびと古訓のあるのを指摘してゐるのを蘭洲はあげて更にそれを敷衍し、「愚案およそ詩歌文章は搢紳家のもてはやすことなり都びたるをいふ心なり」と説いてゐるのや、同じ段の「いとなまめいたる」の語釈で、いとは最なり、なまめけるは婀娜の字なりといふ契沖の説を引いて後、「契沖漢字に釈したるなり、和語にしてとかば　いとはいちといふに同じ甚しきをいふ、なまとはおよそ物のやわらかにてしなやかなるをいふ詞なり」といってゐるのなどは契沖の解に則しての説明である。

第十五段「さがなき」の語釈「古来の注（実は勢語臆断のことである）には悪の字又は恐の字なり」と引用して更に「愚案には険の字しかるべけんか　険悪ともつづきておそるべきこと也……なきは無の字にてはあらざるべし」と説いてゐる。

③第三段「けさう」契沖が懸想の二字をあてて意味を解いたのに

対し彼は、「その義かなはす、仮粧の字を用ふるはなほ可なり、女のかたちをよそほひかざりて　男子によろこびられんとするなり」と説いてゐる。

第二段「まめ男」の語釈。契沖が、日本書紀に忠誠の字をまめとよんでゐるとしてそれを「実なる男なり」としたが蘭洲は、「此解あたれりとも覚えす……忠誠をまめといふは別の詞と見えたり。」と断じ、卑下の詞、いやしき人なりと解してゐる。

第四十段「けしうはあらぬ」の語義。蘭洲は傍註して「貴くはあらぬなり」と記してゐるが、「契沖は怪の字と心得て　あやしうととけり　皆（闕疑抄には「下」と解く）あやまれり」とし彼は「異」の意で、常なみなみならぬことだとしてゐる。

第十四段「中々に」の下に、万葉十二　中々に人にあらすは桑こにもならましものを玉のをばかり」を傍註に見せ消ちしてゐるは後に註した所と重複するためであらう。この段で「よもあけば」の歌は難解であるが、契沖の「はめなで　は狐にくはさでといふ詞也以下略」と「で」を打消の助詞の意に解してゐるのに対し、蘭洲はそれを否定してゐるのかどうか明瞭ではないが、ともかく「このにはとりをきつねにはませんとなり」と反対の意味にとってゐる。

第九段、契沖注にある人の説をひきて「中将は陸奥に下向なるに下総へは何せんとかこえられけん」といってゐるのに対し、この河（隅田川のこと）はむさし下総の間にあれど河上は下野より来る　今の千住の大橋むかしは橋のなくてわたし舟のありけるにこそ　又今の両国橋を東にわたり河にそひて北にゆけば下野にいる　それより陸奥に入るなり」と実地に歩いてきた蘭洲の説明は契沖の欠を補って詳しい。

第六十四段「かたは」の語釈。契沖が「もろ羽あるべきが　かた羽なるはふようの物なるにたとへていふ歟」と矢によって説いてゐるのに対し蘭洲は「矢をもてとかんよりは鳥の羽がひの一方ばかりあるにて云ふをよしとせん歟　又車の片輪にてもとくべし」と契沖説を一応否定しながら、結局のところ結論がでてゐない。

第一段「かいまみ」の語義。勢語通では契沖の説といってはをらないがそこに契沖の説をひいて、「文字しりたる人のなまじひに垣間見の文字を用ふるにより　ひまよりのぞきたるやうにとくはいと俗なり」と評し彼の「かひは間也両山の間を山のかひといふに同じ　まみは目見なり　物のあひだより見たるなり」と結果的には同じことである。むしろこの語義は契沖のあてた垣間見の語に由ってゐるとみるべきで、日本書紀神代巻に「視二其私屏一」を私記に「加支末美太末布」とあるのによっても勢語通の僻説なるを知るべきであらう。また同じこの段で、「おひつぎて」の語義について契沖は「やがての心なり　かひまみてやがて贈るなり」と解し、「ついておもしろきことどもやおもひけん」を「信夫摺に春日野のわか紫とよみてかける業平の心を作者のおしはかりて事の次よくおもしろき事とやおもはれけんといへるなり」と解してゐるのに対して蘭洲は「事の次よくといへるは　この歌に合せて折よく信夫摺を着用せられたるをいへるなり」とし、「さて　この一句を前々の注者得解せざるによ

りて誤りも出たるなり」とここに独自の見のあることを注意し「外の人より中将の心をおしはかりてかけるやうなれどもやはり中将の自記と見えたり」と結んでゐる。つまり

一「おひつきて」の解においては契沖説を受容してゐる。

二「ついでおもしろきこととともや思ひけん」の解において傍線部の客体を、

A契沖は、信夫摺に合はせて春日野のと詠んだことを、とし

B蘭洲は、この歌にあはせて主人公が折よく信夫摺を着用してゐたことを、とする。

Aの方は作者と物語の主人公とを区別とするのだがBの方では作者と主人公とを同一、つまり主人公の自記であると考へてゐるらしい。この段は蘭洲が外巻に収めてゐて、業平の自記ならざる仮作物語とあるべきはづの段であるが、かうした矛盾は先にもあった通りしばしば彼の犯してきたところである。

以上で蘭注と契注との関聯についてその大体を述べたことになるが、かうした関係は勢語通の殆んど全段に見られるところであり、前節で述べたやうに、契沖に由ったと、ことはらない場合でも、それに由ってゐる事が多いのである。また次にあげる一例のやうに一体どこまでが契沖説の引用なのか明瞭をかく場合にもしばしば出くはすのである。

契沖いふあまぐもはよその枕詞なり　空の雲は遠きものゆゑによそとつづくなり　よそは外なり　中絶ぬれど朝暮目に見る故さすがにえ思ひきらでしたふ心もわれはあるに人はつれなくて外に行通ひてわれをある物かとも思はぬとなり（第十九段）

ここで臆断の説の引用は最初の「……枕詞なり」といふ所までである。

契沖は、伊勢物語の作者を、二条の后の名をあらはに書いてゐる事、伊勢と同時代の貫之、後代の直幹の歌をのせてゐる事などから、全篇を伊勢の述作とせず、また右の部分が後人の加筆でもないことを論じて著作の時代を天暦以後に限定した。そしてこの物語の記事は〃作り物語〃であるからして実録ではないとも考へてゐる。一方では古今集も伊勢物語も共に業平の自記に由ったものかとしてみたりもしてゐるが、ともかく実録として見るべからずとしてゐる。その態度は、云はば懐疑的である。ところが蘭洲の勢語観は、最初にのべた通り、業平自記と別人の加筆とを截然と二分してゐる。そこには契沖を介して諸注を参酌してゐる所があるとはいへ、極めて不十分な考証によった彼の結論は、独断のそしりをまぬかれないであらう。

八

このやうにみてくると勢語通は伊勢物語の他の注釈と相当異った性格をもつものであることが分ってくる。そしてこの注釈は蘭洲がかなり自信をもってやってゐる仕事であったことも明らかであるし、殊に朱子学派の漢学者らしい訓詁への偏向は勢語通第二の特色である。このことについては触れるべくして触れるところは僅かであったが、独断誤謬の説も例によって尠くないと思ふ。

勢語通第一の特色は何といっても儒教的な倫理観に照らして伊勢物語を再編したといふことである。

蘭洲による伊勢物語の再編と、それに伴ふ二元的構成説はその細部において各所に矛盾撞著のあることは指摘してきたが、彼のこの着想は必ずしも無稽の方法として葬り去るべきものではなからうと思ふ。

だがしかし、文学評論の立場からすれば、蘭洲のこの興味ある試みも決して成功はしてゐないと考へられる。惟ふにそれは、蘭洲の伊勢物語に対する態度が、文学としてのそれに対するよりも、むしろ文学以前の歴史的事実としての、主人公業平に、関心の重点がおかれてゐたといふことによったのであらう。そのために勢語通の注釈過程が、文学的真実と歴史的事実との不消化な混淆状態を呈するに至ったのはあまりにも当然の結果であった。

ともあれ彼が支那古典の学者としての直覚によって、在五中将を楚辞の主人公に比することのできたのは、日本古典伊勢物語の価値を彼なりに高くせしめるところであったと思はれる。この注釈の筆をとってゐた言はば晩年の彼の胸中に去来する想ひは、やはり偶像業平、偶像屈原に一脈相通ずる不遇の意識であったのではなからうか。

前にも述べたやうに、彼はこの書執筆の動機として、内の巻を「我家のいせ物語とし、ひとつ子のむすめによましむ」ためといひ、外の巻は「言づかひのふるくおもしろ」きによって、従来の注の欠を補ふためであったとしてゐるが、この書を娘のためにだけの著作であったとしたのは恐らく彼の謙退の辞であったらう。そのことは、本書を読んでゆけば分るところであって、その頭注傍注　語釈はいづれも彼自身の講義用の書入本を整理して明らかにパブリケイシンを予想したものであったと思ふのである。

事実この書は、明治四十四年十月、懐徳堂記念会の手で、懐徳堂遺著叢書の内に上下二冊の本として刊行せられてゐる。しかしこの活字本には、頭注　傍注は省かれてゐるばかりでなく、例へば自筆本第九段の「くももおちす」を「くまもおちす」と訂したり「名にし負はば」の歌の解が脱文してゐたりして、不完全なものであるといふことだけを指摘しておくに止めよう。

附記　本稿中に用ひた伊勢物語の段数は、蘭洲自筆本に彼が附してゐる数字によってゐる。しかしその段数には、定家本に比して少なからぬ相違点がある。例へば、定家本の第七八段が塗籠本と略同様で第七　八　九段となり、定家本の第廿八段はなく、第四十段第四十一段は勢語通内上で前者が第四十一段、外上で後者も第四十一段と同じ段数を付けてゐる。また、第百十一段第百十二段と合はせて勢語通は百十一段とし第百十三段・第百十五段を夫々二つ作ってゐる。そのため全体の段数に若干の食ひちがいの生じてゐる部分ができてゐる。

（科学研究費による研究成果の一部）

――大阪大学　助手――